

1. 研究の概要

各医療機関からわが国における国際疾病分類コーディングに関わるデータと診療情報管理担当者によるコーディング結果の提供を受け、コーディング精度の状況に関する現状と課題を把握する。

2. 背景

人口動態統計、疾病統計等で使用している「疾病、傷害及び死因の統計分類」は、世界保健機関（以下WHOという）が勧告した国際疾病分類（以下ICDという）に準拠して定められており、現在、基本的にはWHOが1990年に勧告した第10回修正（ICD-10）に準拠している。

WHOは、最近の医学、医術の進歩に対応して第10回修正（ICD-10）に対して、一部改正（アップデート）を行い、2004年10月にICD-10（2003年版）を勧告したことを受け、わが国も社会保障審議会で検討を行い、「疾病、傷害及び死因の統計分類」の一部改正が平成17年10月7日総務省告示第1147号として告示され、平成18年1月1日から施行され、人口動態統計でも平成18年1月から新しい分類を適用している。

平成17年度より2年間に渡って、厚生労働科学研究費補助金 統計情報高度利用総合研究事業「我が国の統計における死因及び傷病構造の把握精度の向上並びに国際比較の可能性向上に関する具体的研究」班（主任研究者：山本修三、以下山本班という）が調査・研究を行い、死亡診断書あるいは退院時要約におけるICDコーディング精度について課題が多いことを報告した（添付資料1）。この課題の解決策の一つとして、原資料が存在する医療機関において適切な病名記載・コーディングが実施されることが望ましいと考えられたが、こうした取り組みは一部の医療機関に限られた状況にあると考えられ、その取り組みの実態と医療機関におけるコーディング精度の把握が必要と考えられた。（詳細は「添付資料2」を参照のこと）

3. 目的

死亡診断書、退院時要約における国際疾病分類コーディングの精度に関わる問題点とともに、医療機関におけるコーディングの実態とその精度を明らかにする。

4. 申請者と調査担当団体の資料提供に関する同意

本研究は、疫学研究的倫理指針（以下指針という）でいう既存資料の利用による疫学研究であり、指針に準拠していることを、日本診療録管理学会倫理委員会により承認された。そのため、各施設においては、施設長により、指針に準拠した研究であることの確認を得ることで指針の要件は満たすこととなり、倫理審査委員会の審議は要しない（ただし、倫理審査の実施を妨げるものではない）。各施設の実情・判断に応じ、各施設における所定の手続きに従い、データの提供を受けるものとする。

5. 方法

5.1.1 提供資料

- 1) 施設の診療情報管理の実態についての調査票
- 2) 添付資料3に定める調査開始日A以降の「死亡退院例」、調査開始日B以降の「退院例（死亡退院例を除く）」について、その「退院時要約」と「診療情報管理データ（コーディングデータを含む）」、死亡例については「死亡診断書の写し」。
- 3) また、上記2)の情報に対して原死因あるいは主要病態のコーディング作業を行った結果情報。

提供資料は添付資料3に示すごとく 匿名化し、個人識別情報を削除する。

5.1.2 資料収集方法

提供資料は、紙媒体（「死亡診断書の写し」、「退院時要約の紙出力あるいは複写」、「診療情報管理データの紙出力あるいは記入されたもの」）の形で提供される。また、5.1.1 3)の結果情報は電子調査票として電子ファイル化された形で提供される。なお、個人識別情報は削除され、高いレベルでの連結可能匿名化（死亡日・退院日と性別など対応表類似情報は各施設に存在）されている。

5.1.3 収集する情報の詳細

収集する情報及び資料作成方法は添付資料3を参照のこと。

5.2 研究説明、研究参加への同意

各施設には、院内の診療情報の利用に関する規程があり、資料の提供が可能な場合に限り、資料の提供を受ける。資料は、提供時点で既に個人識別情報が削除され、高いレベルでの連結可能匿名化状態（対応表類似情報は各施設に存在）であるため、提供を受ける側で個人を特定することは不可能である。

6. 個人情報管理

各施設から提供された資料はすべて個人識別情報が削除され、高いレベルで連結可能匿名化されているため、本研究で取り扱う資料に含まれる情報だけでは個人をほぼ特定できない。

7. 予測される危険・不利益

本研究によって患者への個人情報漏洩は起こり得ず、これによる研究対象者への危険や不利益は及ばない。また、本研究は介入を伴わない観察研究であるため、対象者に対する危険は想定されない。

8. データ解析と結果の公表・保管について

8.1 各施設における評価点

提供資料から評価点の平均値他の統計値を、施設名は匿名化して計算する。

8.2 全国平均の評価点について

提供資料から評価点の平均値他の統計値を、地域別や病床数別など公開されている施設情報をもとに層別化して計算する。

結果の公表について

匿名化した各施設、全国の評価点の平均値他の統計値については研究班の研究報告書において発表する。また、施設の希望などに応じ、個別に評価点の情報還元を行う。

資料の保管について

提供資料は、極めて高いレベルの連結可能匿名化（対応表類似情報は各施設に存在）された情報であり、日本病院会厚生労働科学研究 研究班（山本班）事務局において、保管する。保管する場合は、部分的には電子媒体にも移行させ、提供された紙媒体も含めて施錠できる場所で保管する。

9. 集計・保管期間

必要に応じて倫理審査委員会などによる承認を受け、その後、資料の提供を受け集計・解析を開始する。提供資料の保管期間は研究事業が終わる平成21年3月31日までとし、復元不可能な形で廃棄する。

様式A-1(3)

厚生労働科学研究費補助金事業実績報告書(抜粋)

平成19年4月10日

厚生労働大臣 柳澤伯夫 殿

フリカナ ヤマト シカガキ
研究者氏名 山本修三

平成18年度厚生労働科学研究費補助金(統計情報総合 研究事業)の事業実績報告書について

平成18年12月21日厚生労働省発統第1221001号をもって交付の決定を受けた標記の事業を完了したので、関係書類を添えて報告する。

1. 研究課題名(課題番号) : 我が国の統計における死因及び傷病構造の把握精度の向上並びに国際比較の可能性向上に関する具体的研究(H18-統計-003)
2. 研究実施期間 : 平成18年4月1日から平成19年3月31日まで
(2)年計画の(2)年目

3. 分担した研究事業の概要

①研究者名	②分担した研究項目	③研究実施場所 (機関)	④研究実施期間
山本 修三	研究立案・総括	日本病院会	平成18年4月から19年3月
大井 利夫 川合 省三 島津 邦男 西本 寛 三木幸一郎	医療機関からのデータ提供による「死亡診断書」および「退院時要約」の国際疾病分類コーディングの精度に関する研究	大阪府立急性期・総合医療センター 埼玉医科大学 国立がんセンター 北九州市立門司病院	
島津 邦男	専門学会(日本神経学会、日本内科学会)用語集に採用されている脳血管障害関連用語とICD分類、コーディングとの関係に関する問題点について	埼玉医科大学	平成18年4月から19年3月

4. 研究結果の概要

A. 研究目的

I CD-10を用いたわが国の死因・傷病統計における臨床病名把握の「精度」を病名記入・コーディング・集計の各段階において、向上させること。

B. 研究方法

- 1) 実際の診療録に記載された病名・病態と記載されたI CDコードとの整合性(死亡診断書および退院時要約のI CDコーディングの精度)に関する研究
昨年度当研究事業の調査研究対象病院310施設のうち、回答のあった198医療機関を対象として、死亡例および退院例について匿名化した記録の形で提供を依頼した。その結果、123施設(62%)から有効な回答を得た。
 - a) 死亡例の分析:平成18年4月1日からの死亡退院例各施設10症例について、(1)死亡診断書の記載のみから原死因を決定し、I CDコードを付与、(2)退院時要約の傷病名と内容を吟味し想定される原死因を読み取ってI CDコードを付与し、両者の異同について検討した。
 - b) 退院例の分析:6月1日からの退院症例各施設10症例について、(1)退院時要約の「主病名欄」に記載された傷病名そのものに対してI CDコードを付与、(2)退院時要約の内容から「主要病態」を選択してI CDコードを付与し、その異同について検討した。
コーディングは、医師グループと診療情報管理士グループの2グループに分かれて点検した上、さらにコアメンバーによる検証や評価を行った。
- 2) 諸医学会の学術用語とI CDの関係の研究
本年度は脳血管障害の関連用語について、日本神経学会、日本内科学会の用語集を検討し、コードの付与などの作業を行った。

C. 研究結果

- 1) I CDコードの整合性(I CDコーディングの精度)に関する研究
 - a) 死亡例の分析:死亡例については、1224件が解析の対象となり、死亡診断書からのコーディングに基づく分類では新生物が50%を占め、次いで循環器系、呼吸器系疾患によるものが続いた。死亡診断書の記載に基づく死因のI CDコードと退院時要約の内容の検討に基づくI CDコードの異動については、I CD-10の3桁分類までが一致した症例が80%以上あったが、章が異なる症例も97例(8%)存在していた。章が異なる症例については、死亡診断書において新生物に分類された症例においては精度が高く、呼吸器系、腎泌尿生殖器系に分類された症例における精度が比較的低いという傾向が認められ、今後はこうした症例に関する詳細な分析が必要と考えられた。
 - b) 退院例の分析:退院例については、1207件が解析の対象となり、退院時要約の主病名での分類では新生物が259例(21%)を占めたが、他の疾患にも分散する結果となった。要約の主病名と要約内容の検討に基づくI CDコードの異同は死亡例に比べて小さく、章の異なる症例は48例(4%)であった。
- 2) 諸医学会の学術用語とI CDの関係の研究
「ラクナ梗塞」など臨床の場で頻用される用語について、用語集との乖離、さらにはI CD-10に適切な分類が存在しない等の問題点が把握された。

D. 考察

- 1) I CDコードの整合性(I CDコーディングの精度)に関する研究
死亡例、退院例を通して、記録の見読性の低さや記載の仕方の標準化ができていないことなど、わが国の診療情報管理上の問題点が明確となった。また特に死亡診断書に関しては、原死因選択のルールについての基本的理解なく記載されており、退院時要約に比して情報粒度が低く、こうした点がI CDコードの乖離の要因として考えられた。
その他、問題点として指摘された点は、死亡診断書については、旧式の様式(95年以前、I CD-9時代の様式)を未だに使用している病院がある点、死亡したときの入院時の情報のみにより記載がなされている点など、退院時要約については、記載内容(精度、粒度を含めて)に病院間あるいは診療科・担当医師による格差が大きい点、非常に専門性の高い眼科等の退院時要約の一部に、他診療科の医師をはじめとした第三者には理解しがたい略語や記載方法等がみられた点、傷病名やI CDの選択等において、恐らくは「標準病名」等を使用することに起因すると思われる不適切なI CDコードの付与が見られた点、今回の入院の経過しか記載されておらず、全体的な傷病の経過を評価出来ない点がある。

一方で、要約の内容、傷病名欄の記載は全く不十分であるにもかかわらず、粒度の高いICDがコーディングされ登録されているものが散見され、要約の内容や傷病名の記載以外の情報に基づいて病院情報システムにICDコードを診療情報管理部門が付与していると思われる症例も存在した。

概して、

- (1) そもそも、死因や要約における主要病態等についての意識が低いことが根底にあり、ICDのルールにおける適否以前に、傷病名についての必要性や精度、さらには死因統計や疾病統計の意義が恐らくは十分に理解されていないという背景が推測された。
- (2) 基本的に「第三者評価」を前提としていないので、自分だけがわかれば良いという意識が明らかに存在するよう思われ、明瞭でない表現（略語の乱用、不完全な英語記載等を含めて）が極めて多いことがそのことを示していると考えられた。
- (3) 電子保存等の一般化に伴い、要約や添付資料等にデジタルデータをプリントアウトしたのもも多数あり、それらには内容的に不十分、もしくは不完全なものが少なくなく、予想に反して紙ベースの診療記録よりも電子保存による記録の方が内容は貧弱であった。

2) 諸医学会の学術用語とICDの関係の研究

脳血管障害については、世界的に臨床現場で用いられているNINDS-I-II (The National Institute of Neurological Disorders and Stroke, 3rd edition, 1990) との整合性に留意する必要があるが、リビジョンに向けての提案として対応する必要があると考えられた。

E. 結論

現状において、死亡診断書や退院時要約に基づく診療情報やICDコードの精度向上のためには、医師に対しての死亡診断書記載についての意義・ルールの再教育や原死因選択ルール等の整理と簡略化、死亡診断書様式の改善、さらには退院時要約の標準化や診療情報管理士の介入を積極的に進める等の対策を検討する必要があるものと考えられた。

5. 研究により得られた成果の今後の活用・提供

改善のための提案

- 1) 医師に対しての死亡診断書記載についての意義やルールの再教育が必要と考える。
- 2) 原死因選択ルール等の整理と簡略化が望ましいと考える。我が国の医療レベルを考慮すると、曖昧で複雑な選択ルールの存在はかえって混乱を招くだけであり、死亡診断書の作成については医師に基本的なルールを周知することが重要であると考えられる。
- 3) 死亡診断書様式の改善が必要であると考えられる。死亡診断書の傷病名欄は「死亡統計をとるために存在している」ことをもっと強調すべきではないかと考える。また、慢性腎不全や多臓器不全なども他の疾患の終末像と考え、必ずそれを引き起こした傷病を記載するよう明記する必要があると考える。併せて、寝たきりの患者等はかならずその状況を記載するよう注意書きがあつてよいと考える。
- 4) 死亡診断書の発行に当たって診療情報管理士の介入を積極的に進めることを提案する。確かに、現状では死亡診断書作成の段階でリアルタイムに診療情報管理士が介入することは困難である。しかし、少なくとも教育病院としての役割を担う臨床研修指定病院等では、後に診療内容と検証した上で記載者にフィードバックする、という仕組みを院内業務として確立することは極めて重要である。結果的に、診療情報の水準向上に繋がると考える。
- 5) ICDそのものの教育が十分でないために、「病院情報システムや標準的な傷病名マスターを導入すればICDをはじめ精度の高いデータが維持できる」と誤解してしまい、使用方法を誤ってミスコーディングに繋がっていることも事実である。改善策としては、より精度の高いコードを任意に登録できるシステムを持つこと、コード体系に関する早期教育と啓発を絶やさないことが必要であると考えられる。

退院時要約のパラツキや傷病名の記載の不十分さは、疾病統計の精度に関わる重要な問題であると考えられる。入院治療計画書のように、臨床系の諸学会が協力して、退院時要約の様式を統一して最低限の共通フォーマットを決めたり、標準要約記入マニュアルを作成したりすることで標準化することを考慮する必要があると考える。

6. 研究の実施経過

調査対象病院については、昨年度の当研究事業の調査研究対象病院310施設から始まったが、ICDの問題について回答を寄せられた198の医療機関に絞り込み、引き続き18年度も診療情報管理とICDについて一定の水準にあるものとして選択し、死亡例および退院例について十分匿名化した記録（コピー）のデータ提供を依頼した。その結果123施設（62%）から有効な回答を得た。
（今年度実施した調査対象123施設）

対象施設	施設数
特定機能病院など	27
DPC試行適用病院または単独型の臨床研修指定病院の中から、診療情報管理室があり診療情報管理士を有する病院	59
上記以外の「診療情報管理士指導者」を有する病院	3
上記以外の「日本病院会役員」が在籍する病院	24
上記以外の「日本診療録管理学会評議員」が在籍する病院	9
上記以外の「日本病院会診療情報管理士通信教育委員会委員の在籍する病院	1
計	123

具体的には、「死亡診断書」の精度調査として平成18年4月1日からの死亡退院例10症例について死亡診断書と退院時要約を分析対象とした。また、「退院症例」として、平成18年6月1日からの退院症例について、診療科ができるだけ偏らない方式を指示して選択、送付された退院時要約と病院（病歴・診療情報システム）登録情報データを分析対象とした。

「死亡例」については、（1）死亡診断書の記載のみから原死因を決定してICD-10コードを付与（以下コーディングと略す）、（2）一方で、退院時要約の傷病名と内容を吟味し想定される原死因を読み取ってコーディングし、両者の異同について検討することにした。

「退院例」については、（1）退院時要約の「主病名欄」に記載された傷病名そのものに対してコーディング、（2）退院時要約の内容から、今回の入院の「主要病態」を選択してコーディングし、当該医療機関の（3）病院（病歴・診療情報管理）システムに登録されている「主病名」とそのICDとの異同について検討することにした。

対象病院から送付されたデータ資料については、まず各資料を、①診療情報管理士の資格を持つ医師を中心とした「医師グループ」と、②日本診療録管理学会が認定した診療情報管理士指導者や診療情報管理士通信教育の講師を中心とした「診療情報管理士グループ」の2グループによって、同じ資料を分担してそれぞれ複数の検証者（以下検証者という）が点検した。作業内容としては、研究協力者による上記のコーディングのほか、さらに必要に応じて特記事項コメントの記載等を依頼した（「一次評価」と称す）。

その後、コアメンバーの検証者（以下コアメンバーという）によって、一次評価結果の検証や評価を行った（「二次評価」と称す）。死亡診断書と退院時要約の内容について、二次評価までの検証者によるコメントをまとめた。

次に、二次評価の結果をもとに、死亡例については（1）「死亡診断書によるICD-10コード」と（2）「要約に基づくICD-10コード」について、ICD-10コードの3桁以上が一致している精度の高いもの、ICD-10コードの3桁は一致しないが、ICD-10の大分類、すなわち第1章：感染症および寄生虫症などの章は一致する比較的精度の低いもの、および大分類（章）さえ異なる極めて精度の低いもの、の3つに分けてその例数及び比率を検討した。

退院例については（1）「主病名欄に記載された病名のICD-10コード」（2）「要約の内容に基づくICD-10コード」について、同様に精度の高いもの、比較的精度の低いもの、極めて精度の低いもの、の3段階に分けて分析した。

厚生労働科学研究費補助金交付申請書（抜粋）

平成18年4月20日

厚生労働大臣 柳澤 伯夫 殿

フリガナ ヤマト シュゲウ
申請者 氏 名 山本 修三

平成19年度厚生労働科学研究費補助金（統計情報総合 研究事業）交付申請について

標記について、次により国庫補助金を交付されるよう関係書類を添えて申請する。

1. 研究課題名（課題番号）：我が国の統計における死因及び傷病構造の把握精度の向上を図るための具体的な方策についての研究（H19-統計-003）
2. 当該年度の研究事業予定期間：平成19年4月1日から平成20年3月31日
（2）年計画の（1）年目

3. 研究組織

研究者名	分担する研究項目	所属機関及び現在の専門 (研究実施場所)	所属機関 における 職名
山本 修三	研究立案・総括 診療情報の質向上についての方策の研究	社団法人日本病院会、病院管理、 診療情報管理（日本病院会等）	会 長
大井 利夫	平成18年度厚生労働科学研究事業・山本修 三班における全国調査の結果を検証	社団法人日本病院会、病院管理、 診療情報管理、医療安全 （日本病院会等）	副会長 委員会委員長
川合 省三	医療の現状からみたICDに関する構造的課 題の研究	大阪南脳神経外科病院 （日本病院会等）	副院長
島津 邦男	ICD導入における我が国での適応性につ いての研究	埼玉医科大学神経内科、医療安 全、危機管理（日本病院会等）	教 授
西本 寛	ICDの疑義解釈対応についての研究	国立がんセンターがん対策情報 センターがん情報・統計部院内が ん登録室（日本病院会等）	室 長
三木幸一郎	ICDコーディング向上のための死亡診断書 と退院時要約の記載方法の研究	北九州市立門司病院内科、肝臓病 学（日本病院会等）	内科部長
菅野健太郎	ICDの改訂に向けた内科学的見地からの取 組について	自治医科大学消化器内科	教 授 副院長
藤原 研司	ICDの改訂に向けた我が国の意見集約に関 する研究	横浜労災病院	院 長

4. 研究の概要

ICDは、WHOが保健医療統計の分野において、国際比較可能性の向上のために定められた統計分類であり、わが国の死因及び疾病統計には不可欠なものである。しかしながら、医学の進歩、医療の発展に伴い、傷病構造の変化と、医学的要因、社会的要因、複合病名や併存病名等の影響により、主要な死因や傷病名が正確に把握できていない分類になっているのではないかと懸念がある。

一方、主要な死因や傷病名を把握する場合に、その情報元となる、死亡診断書や退院時要約の側についても、不適切な記載が認められることが平成17・18年度に行った山本修三班の研究による全国調査の結果より明らかとなった。

医療情報の質の向上という観点から、ICDそのものの国際比較可能性向上についての検討を行うとともに、我が国におけるICD活用の実態を把握しつつ、より幅広い普及を念頭に、日常的に医療情報に関わるすべての従事者が実施可能である現実的な対応について検討を行う。

5. 研究の目的、必要性及び期待される成果

主要な死因や傷病名の正確な把握を主とした、「医療情報の質の向上」を研究目的とする。

国際的な背景として、WHOにおけるICDへの取り組み状況として、一つには、平成18年11月に行われた、世界保健機関国際分類ファミリー（WHO-FIC）ネットワーク会議において、死亡統計の観点からの検討グループに加え、疾病統計という観点から分類体系を見直す、恒常的な検討グループが正式に立ち上がっている。診療情報の活用や、保険支払い等、疾病状況の把握のためにICDを活用している我が国としては、国際会議の場において、国際的にも我が国にも適切な分類体系を目指すべく、意見を提示する必要に迫られている。また、もう一つの背景として、WHOは、ICD-11への改訂（リビジョン）に向け、2015年の完成を目処とした、具体的な組織作り等に着手している状況がある。ICDそのものの改善点については、ICD改訂作業の早い段階から、我が国としての意見を、積極的に提示し、改訂草案に反映させていく必要がある。

国内の状況として、平成17・18年度の2年間、厚生労働科学研究費補助金による研究事業「我が国の統計における死因及び傷病構造の把握精度の向上並びに国際比較の可能性向上に関する具体的研究」の全国調査の結果から、死亡診断書の精度上の問題点とともに、退院時要約のパラツキや傷病名の記載の不十分さが明らかとなった。医療情報の質の改善という観点から、改善方策を検討する必要がある。

ICDそのものの改善点の整理、及び、ICD活用方法の具体的方策として、退院時要約の様式の統一、最低限の共通フォーマット、項目、並びに標準的退院時要約記入マニュアルの作成等による、我が国における医療情報の質の向上の実現に資することが研究成果として期待される。

6. この研究に関連する国内・国外における研究状況及びこの研究の特色・独創的な点

当該研究は、診療情報、特に「死亡診断書」や「退院時要約」のICDコーディングの「精度」の調査について、全国の特設機能病院や研修指定病院など診療情報管理が一定水準以上の123施設から「死亡例」と「退院例」について厳重に匿名化したコピーについて検証するという研究成果を基礎としている。このような全国的な調査は、国内において他に類を見ないと考えている。

このような研究は、国外の研究を参考にはできるものの、我が国では、言語が世界的に見れば特異であるという背景があり、国外の研究をそのまま適用できるものではない。分類側から実務を見て検証を行うのではなく、実務を通して分類とその活用を見直す研究である点、また、死亡統計としてのみ、あるいは、疾病統計のみ、というそれぞれの切り口ではなく、診療情報として、どちらも視野に入れている点がこの研究の特色であり、独創的な点だと考える。

7. 申請者がこの研究に関連して現在までに行った研究状況

平成17・18年度の2年間、厚生労働科学研究費補助金による研究事業「我が国の統計における死因及び傷病構造の把握精度の向上並びに国際比較の可能性向上に関する具体的研究」を実施した。

- ①17年度：ICD等の疾病分類使用の実態調査と関連する問題点の把握：医師及び診療情報管理士に対する調査・分析（全国の主だった医療機関、例えば、特定機能病院やDPC試行適用病院または単独型の臨床研修指定病院の中から、診療情報管理室があり診療情報管理士を有する病院等を対象にアンケートを送付し、医師及び診療情報管理士から350件を超える回答を得、その詳細な分析から、我が国におけるICDに対する認識と利用上の現状の問題点を抽出した。）
- ②18年度：医療機関からのデータ提供による「死亡診断書」及び「退院時要約」の国際疾病分類コーディングの「精度」に関する調査・分析（17年度回答のあった198施設を対象に死亡例と退院例の記入についての問題点と課題を全国レベルで調査し、現状の記載死因病名や臨床病名と統計調査との整合性の検討を行っている。）

8. 研究計画・方法及び倫理面への配慮

今後2年間の研究計画を次のとおりに考えている。

▶19年度

- ① 17年度・18年度厚生労働科学研究事業「我が国の統計における死因及び傷病構造の把握精度の向上並びに国際比較の可能性向上に関する具体的研究」（主任研究者＝山本修三）で得た結果データについての更なる分析・検証、問題点の抽出を考えている。
- ② 我が国の医療の現状からみたICDに関する「構造的な課題」の検討。
- ③ 我が国へのICD導入におけるその「適応性」についての検討。
- ④ ICDコーディング向上のための「死亡診断書」や「退院時要約」の記載方法の検討。
- ⑤ 「診療情報の質の向上」についての方策の検討。

▶20年度

- ① 17年度・18年度の前出同研究事業の全国調査を基に、更に各問題点の詳細について全国アンケートを実施する。
- ② 19年度のコーディング向上のための記載内容等の検討結果を受け、理想とする新フォーマット案を実際に試行・活用して、その効果・影響を検証する。

当該研究は、医療情報の質の向上を念頭に検討を行う。必要に応じて、各関係学会の関係者等も交え、必要に応じてワーキンググループを開催し意見の調整を図る。

倫理面への配慮

本研究は、前年度までの研究による完全に匿名化した調査結果をもとに行うものであり、個人が特定可能な情報は扱わない。報告書等において、ICDに関する著作権等への配慮を行う。

＜研究方法の概要＞

死亡診断書、調査票等に記入する病名記入方法等の改善に関する研究

死亡診断書等の記入にあたっての問題点、課題等を全国レベルで調査する、現状の記載死因病名・臨床病名と統計調査との整合性を検討するとともに、医療機関において、診療情報管理士がコーディング作業を実施した場合の精度向上の効果について評価する。

a) 死亡診断書に関する調査

1. 調査協力病院に対し、調査開始日A(平成19(2007)年6月1日)から死亡された時間順に「10件の死亡例」について、各々「退院時要約」、「死亡診断書」と「診療情報管理データ(下記※印の説明を参照)」の3種類ずつのコピー提出と、当該施設の診療情報管理士による死亡診断書の記載のみからの原死因コードおよび退院時要約を参照した上での原死因コードを所定のデータシートへの記入を依頼する。
(提出にあたっては、個人識別情報等を消去し、高いレベルの連結可能匿名化処置を施す)
2. 上記の情報を、医師1名と診療情報管理士1名が独立して、死因欄の記載を検討し、そのコーディングに向けての妥当性を評価する。
評価については、数項目について記載内容を検討し、スコアリングする。
3. 各施設に対しては、全国集計の結果について報告書等を通じて情報を還元し、希望があれば、施設提出情報の個別の評価の還元も考慮する。

※ 「診療情報管理データ」とは、病院の疾病統計などに用いるために集積されている

- ① 主たる病名とICD-10コード
- ② その他の病名とICD-10コード
- ③ 手術・処置
- ④ 転 帰

の各項目に関する当該入院の情報を指す。

b) 退院時要約によるコーディングに関する調査

1. 調査協力病院に対し、調査開始日B(平成19(2007)年8月1日)以降に退院の順に「10件の退院例(死亡例を除く)」についての各々「退院時要約」と「診療情報管理データ」のコピー提出と、当該施設の診療情報管理士による退院時要約の病名記載のみからの主要病態のコードおよび退院時要約を参照した上での主要病態のコードの所定のデータシートへの記入を依頼する。
(提出にあたっては、個人識別情報等を消去し、高いレベルの連結可能匿名化処置を施す)
2. 上記の情報を、医師1名と診療情報管理士1名が独立して、疾病名欄の記載を検討し、そのコーディングに向けての妥当性を評価する。
3. 評価については、数項目について、記載内容を検討し、スコアリングする。
4. 各施設に対しては、全国集計の結果については、報告書などを通じて情報還元し、希望があれば、施設提出情報の個別の評価の還元も考慮する。

※ 「診療情報管理データ」とは、病院の疾病統計などに用いるために集積されている

- ① 主たる病名とICD-10コード
- ② その他の病名とICD-10コード
- ③ 手術・処置
- ④ 転 帰

の各項目に関する当該入院の情報を指す。

上記のa)とb)の研究ともに、評価に当たる医師は診療情報管理業務およびICD-10に精通した者があたることとする。

平成 19 年度厚生労働科学研究費補助金統計情報総合研究事業
国際疾病分類の諸課題に関する調査のためのデータ提供について
(ファックス03-5215-1045)

※恐縮でございますが8月8日(水)までをお願いいたします

主任研究者 山 本 修 三 行

貴院からの該当するデータ提供等について(該当するところに○をお付け
ください)

協力する

または

協力しない

病院名	
所属・役職	
お名前	

平成19年8月20日

理事長様
病院長様
診療情報管理担当者様

厚生労働科学研究費補助金統計情報総合研究事業

「我が国の統計における死因及び傷病構造の把握精度の
向上を図るための具体的な方策についての研究」

主任研究者 山本修三(社団法人日本病院会会長)
(公印省略)

国際疾病分類の諸課題に関する調査のためのデータ提供について(お願い)

拝啓 時下益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

平素より多大なご支援ご協力賜り、誠にありがとうございます。

さて今回、標記の件につきまして7月26日付当研究事業から貴院に対しご協力のご依頼をお願いしましたところ、その主旨にご賛同いただき、該当するデータ提供および所定の評価票への入力作業にご協力いただくことに対し、大変感謝申し上げます。誠にありがとうございます。

つきましては、下記のとおり資料をお送りいたしますので、大変恐縮でございますが9月26日(水)までに同封の返信用小包封筒にてご返送いただくようよろしくお願いいたします。なお、「データ提供」と「貴院での評価票への入力作業」は相互関係のあるとても重要なデータベースになります。ご提出の際はどうかひとつでも足りませんとご提供いただいたデータは残念でございますがすべて無効となりますので予めご理解いただきたく存じます。

諸事ご多忙と存じますが、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

敬具

記

1. 添付資料 ①貴院への依頼項目、「退院例の調査10例の選び方について」、「評価票への記入の仕方」を含むマニュアル(6ページ)
②評価票の入ったUSBメモリー1個(エアークッキングに入っていますので返送の際もお使いください)
③返信用小包封筒1枚(エクスパック500)
2. 貴院の指定施設番号は となります。死亡診断書と退院時要約の各コピーデータにつける「症例番号」に必要となります。これは評価票の施設番号と同じになっています。

問い合わせ先など : 厚生労働科学研究費補助金統計情報高度利用総合研究事業「我が国の統計における死因及び傷病構造の把握精度の向上を図るための具体的な方策についての研究」事務局

社団法人日本病院会(通信教育課担当 千須和、沼上)

〒102-0082 東京都千代田区一番町13-3

電話03-5215-1044、FAX03-5215-1045

貴院への依頼項目について

1. 「死亡診断書」について

2007年6月1日から日付順に10名の死亡例について、各死亡者からの「死亡診断書」と「退院時要約」のコピーのセットの提供をお願いいたします。

これにつきましては、① 患者氏名

② 個人が特定されるような患者ID（カルテ番号）

③ 患者住所

④ 患者の生年月日の月日部分

⑤ 主治医・担当医師名

⑥ 施設名

の6項目が判らないように電子的な処理や黒く塗りつぶすなど「匿名化」するように処理願います。また、お手数ですが、それぞれに「999A99M」という書式の症例番号（評価票の記入の仕方を参照：[9]は数字を表し、はじめの3桁の数字は貴院の指定施設番号を意味し、「A」は死亡例、次の2桁の数字は死亡例10名の通し番号、「M」は診療情報管理士による評価を意味します）をコピー書類の右上に記入してください。

なお、同じ傷病名でも年齢・性別によってICDコードが異なる場合がありますので、生年月日の「生年部分」と「性別」は明示願います。なお、死亡者が10名に満たないものは、8月30日までの症例についてお送り願います。

2. 「退院時要約」について

2007年8月1日以降の退院例から日付順に、できるだけ異なる診療科からの10名の各患者の「退院時要約」と「診療情報管理データ」（ICD-10コード）のコピーのセットの提供をお願いいたします。

（退院患者の調査10例の選び方については次頁の具体例をご参照願います）

※「診療情報管理データ」とは病院情報システムなどに入力され保管されている当該入院の疾病名やICDコードなどの情報のプリントアウトを指します。

このコピーには「999B99M」という書式の症例番号をコピー書類の右上に記入してください。（評価票の記入の仕方を参照：[9]は数字を表し、はじめの3桁の数字は貴院の指定施設番号を意味し、「B」は退院例、次の2桁の数字は退院例10名の通し番号、「M」は診療情報管理士による評価を意味します）

これにつきましても上記1.と同様に「匿名化」するように処理願います。

3. 上記、1. および2. でご提供いただいた症例について、診療情報管理部門として評価およびコーディングをしていただいた評価票データを同梱のUSBメモリーへ保存して、返送していただくことをお願いいたします。

（評価票への入力の仕方は次々ページ以降の説明をお読みになり、評価・コーディング結果を入力して、USBメモリーへ「上書き保存」してください）

以上3項目について本年9月26日（水）までに同封の返信用小包封筒（エクスパック500）をお使いいただき、一緒にご返送いただくようご協力のほど、よろしくお願いいたします。

退院例の調査10例の選び方について

※退院例としては、死亡退院例を除外してください

i)入院担当となる診療科が10診療科以上あるケース

- ① 8月1日退院症例をリストアップし、同一診療科からの退院症例については各1例に限って（内容にかかわらず無作為に）対象症例として選定します。
- ② この時点で、10診療科から退院例があれば、その10症例を対象症例とします（10診療科症例以上あれば、無作為に適宜10診療科分の症例を選びます）。
- ③ 対象症例が10症例に満たない場合は、不足分をさらに選定するために、次いで翌日の退院症例のリストアップを行います。
- ④ すでに対象として選定された診療科以外の退院症例があれば、同一診療科からの退院症例を各1例に限って（内容にかかわらず無作為に）対象症例として選定します。
- ⑤ 対象症例が10症例以上あれば、当該日退院分の対象症例から内容にかかわらず無作為に合計10症例

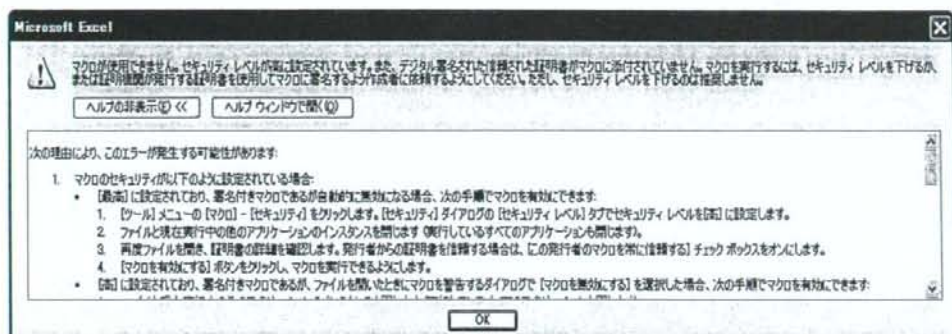
ii)入院担当となっている診療科が10診療科未満の時、あるいは、10診療科以上でも一部の診療科の入退院が極端に少ないケース

- ① 8月1日退院症例をリストアップし、同一診療科からの退院症例については1例に限って選定する。
- ② 翌日の退院症例をリストアップし、すでに選ばれた診療科以外からの退院症例があれば、そのうちの各1例を対象症例とする。
- ③ この時点で10症例以上あれば、当該日の退院症例から対象症例合計が10症例となるように無作為に選ぶ。
- ④ 合計10症例に達しない場合は、前日に選ばれている診療科の退院症例も対象として、各診療科から各1症例を無作為に選ぶ。
- ⑤ この対象選定の手順を②→③または④の形で繰り返す。

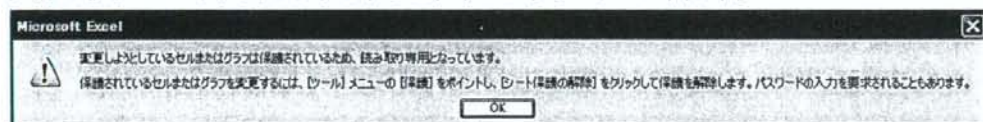


評価票への記入の仕方

最初にファイルを開いた時に、以下の警告が出る場合がありますが、「OK ボタン」をクリックして先に進んでください。



原則として、「色の塗られているセル」に入力するようにしてください。
入力できないセルに入力しようとすると、下のようなエラーが出ます。



入力が必要なシートは、「フェイスシート (FaceSheet)」、「死亡例」、「退院例」の3枚です。

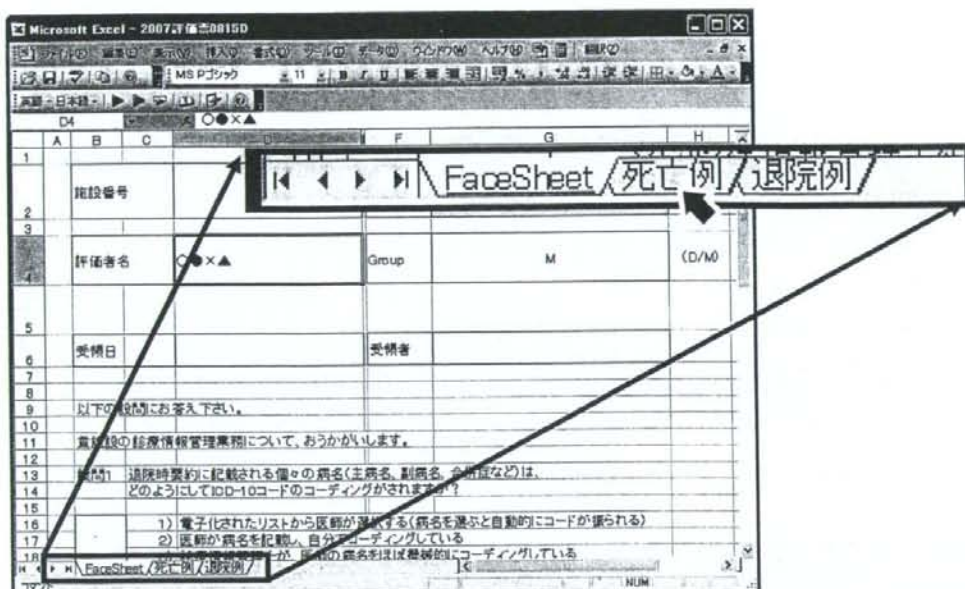
1. 指定された「施設番号」、「施設名」がフェイスシートに入力されているかを確認してください。
(合致していない場合は、修正してください。)

次に、「評価者名」の欄に「担当者の氏名」をご記入ください。各設問は貴院の診療情報管理の現状についてです。一部は数字を選び、必要に応じて、セルの中に記載してください。

	A	B	C	D	E	F	G	H
1								
2		施設番号		002	施設名	DEF病院		
3								
4		評価者名	○●×▲		Group		M	(D/M)
5								
6		受領日			受領者			
7								
8								
9		以下の設問にお答え下さい。						
10		貴施設の診療情報管理業務について、おうかがいします。						
11		設問1 退院時要約に記載される個々の病名(主病名、副病名、合併症など)は、どのようにしてICD-10コードのコーディングがされますか？						
12								
13								
14								
15								
16								
17								
18								

1) 電子化されたリストから医師が選択する(病名を選ぶと自動的にコードが振られる)
2) 医師が病名を記載し、自分でコーディングしている
3) 診療情報管理士が、医師の病名をほぼ機械的にコーディングしている

2. シート下部の「シート選択タブ」の「死亡例」をクリックしてシートを開いてください。



3. 「死亡例」の順番に従って、
提出資料の死亡診断書、
死亡時の退院時要約
(できるだけ書類の右上)に
評価票にある症例番号を記載
してください。

※ 匿名化処理も忘れずに
お願いします



4. まず、退院時要約を参照せず、死亡診断書のⅠ欄(ア)～(エ)、Ⅱ欄にかかれた疾病名だけをみて原原因となるものを選び、その ICD-10 コードと疾病名をシートのAに記載してください。

次いで、退院時要約を読み、(病名の欄だけでなく)その記載内容全体から、原原因として適切と思われる病態を考え、その ICD-10 コードと疾病名をシートのBに記入してください。

必要に応じて、Cにコメントを記入し、ICDコードの下にエラーの表示がなければDの評価済みチェックボックスをクリックして、評価済の表示にしてください。

※ ICDコードは、基本コード(4桁)までを「X99.9」の形で、半角アルファベット大文字+半角数字+半角数字+「.」(半角)+半角数字で入力してください。3桁しかないコードでは「D45」のように「.」以下を省略してください(簡単なエラーチェック機能を内蔵しており、3桁しかないコードで3桁以上を入力すると、Eのように赤字でエラーが出ます)

1	症例番号	002A01M	担当者名	書類の右上に書く症例番号は この番号を対応させてください	評価済
2	死亡診断書を元にした原死因のコーディング ※ 退院時要約は参照せずに、診断書のみでコーディングしてください。				
3	※ 99.9のように半角で空白を含まず、ICD-4桁<J>を含め5文字までを入力してください。				
4	A)	ICD-10	C793	疾病名	転移性脳腫瘍
5	退院時要約を元にした原死因のコーディング ※ 退院時要約を参照した上で、原死因をコーディングしてください。				
6	※ 99.9のように半角で空白を含まず、ICD-4桁<J>を含め5文字までを入力してください				
7	B)	ICD-10	C343	疾病名	左下葉の扁平上皮肺癌
8	C) 原発巣の記載なし				
9	D) <input checked="" type="checkbox"/> 評価済				
10	症例番号	002A02M	担当者名	○●×▲	評価未
11	死亡診断書を元にした原死因のコーディング ※ 退院時要約は参照せずに、診断書のみでコーディングしてください。				
12	※ 99.9のように半角で空白を含まず、ICD-4桁<J>を含め5文字までを入力してください				
13	E)	ICD-10	D45.1	疾病名	真性多血症
14	※ 99.9のように半角で空白を含まず、ICD-4桁<J>を含め5文字までを入力してください				
15	F) <input type="checkbox"/> 評価未済				

5. 再び、シート最下部の「退院例のタブ」をクリックして、退院例のシートを開いてください。

6. 「退院例」については、死亡例と同様に、8月1日以降の退院例（死亡退院を除く症例）の提出資料の退院時要約など（できるだけ書類の右上）に評価票にある症例番号を記載してください。 ※ 匿名化処理も忘れずをお願いします

次いで、退院例のシートに「ICD-10コード」と「疾病名」を記載していきます。

退院例では、上から順に、

- 1) 要約の主病名欄に記載された主要病態を疾病名の欄に転記して、コーディングします。
(原則として、要約に記載されたままの疾病名を転記してください。)

主病名欄がない場合は、病名欄の先頭の病名を、
主病名に当たる疾病名欄が複数ある場合は、
医師が記載した主病名（DPCの定義と同様）を採用します。

- 2) 要約の記載内容を読んで、その内容から主要病態を判断し、その疾病名とコーディングを記入してください。

3) さらに、この退院時要約とは別途、病院情報システムに記録されている主要病態があれば、その疾病名とコーディングを記入してください。

の3つ(6項目)となっています。

コメント、評価済みチェックは退院例と同様です。

症例番号	002B01M	担当者名	○●×▲	評価済
退院時要約の主病名欄に記載された主要病態のコーディング ※ 退院時要約の主病名に記載された病態をコーディングしてください。				
ICD-10	I48	疾病名	Af	
退院時要約の記述から判断される主要病態のコーディング ※ 退院時要約の内容を読んで、主要病態をコーディングしてください。				
ICD-10	I50.0	疾病名	心房性心不全	
病院情報システムに記載された主要病態のコーディング				
ICD-10	I42.0	疾病名	拡張型心筋症	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> 書類の右上に書く症例番号は この番号を対応させてください </div>				
				コメント
				退院時要約に、心筋症の記載ないが、以前の入院で拡張型心筋症と診断されて加療中
<input checked="" type="checkbox"/> 評価済				
症例番号	002B02M	担当者名	○●×▲	評価済
退院時要約の主病名欄に記載された主要病態のコーディング ※ 退院時要約の主病名に記載された病態をコーディングしてください。				
ICD-10	S72.0	疾病名	頸部骨折	
退院時要約の記述から判断される主要病態のコーディング ※ 退院時要約の内容を読んで、主要病態をコーディングしてください。				
ICD-10	S72.0	疾病名	大腿骨頸部骨折	
病院情報システムに記載された主要病態のコーディング				
ICD-10	S72.0	疾病名	大腿骨頸部骨折(開放性)	
				コメント
				疾病名の記載が、「頸部骨折」
<input checked="" type="checkbox"/> 評価済				

7. 以上の記入が終わったら、USBメモリーにファイルを「保存」して下さい。

死亡例 10 例、退院例 10 例について、ICD-10 コードとその疾病名をきちんと保管できたら、同封の返信用小包封筒に「匿名化した提供データ」と「USBメモリー」を一緒に送付してください。

※ なお、回答シート動作などの不具合などがありましたら、事務局までご連絡いただきますようお願い申し上げます。

平成19年10月10日

関係各位

厚生労働科学研究費補助金統計情報総合研究事業

「我が国の統計における死因及び傷病構造の把握精度の
向上を図るための具体的な方策についての研究」

主任研究者 山本 修三 (社団法人日本病院会会長)

(公印省略)

厚生労働科学研究事業への研究協力をお願い

拝啓 時下益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

平素より多大なご支援・ご協力賜り、誠にありがとうございます。

さてご承知のとおり、厚生労働省社会保障審議会統計分科会「疾病、傷害及び死因分類専門委員会」(以下専門委員会)では、WHOから提案される国際疾病分類(以下ICD)の普及、ICDの改正・改訂プロセスへの対応、わが国で使用するICDのあり方などを恒常的に検討しています。日本診療録管理学会からは大井利夫理事長が専門委員会の委員として参画し、さまざまな具体的提案をしています。また、この専門委員会をバックアップできるような体制を確保し、日本診療録管理学会所属の診療情報管理士である医師や診療情報管理の専門家の英知を結集し、よりよい医療を実現するため国内の医療に留まらず国際的な視野にたった取り組みを目指しています。

今までに私たちは、①平成17・18年度厚生労働科学研究事業「我が国の統計における死因及び傷病構造の把握精度の向上並びに国際比較の可能性向上に関する具体的研究」(主任研究者・山本修三)の調査研究、②現行ICD-10の改善を行うアップデートと2015年を目途としてICD-11への改訂(リビジョン)作業の支援などに取り組んできました。

つきましては今回、厚生労働科学研究事業「我が国の統計における死因及び傷病構造の把握精度の向上を図るための具体的な方策についての研究」において、医療機関からのデータ提供による死亡診断書および退院時要約の国際疾病分類コーディングの精度に関する研究についての「研究作業」に、診療情報管理に携わっている医師と、診療情報管理士指導者の豊富な経験と公正な視点からのご協力を是非いいただきたく、お伺いいたします。次回以降も何かとお世話になるかと存じますが、その都度ご連絡をさせていただきます。

今後、医療情報の質の向上、ひいては医療の質の向上の一翼を担うべく、ICDの改善や適切な普及に向け、より一層努力したいと考えておりますので、今後ともご協力賜りますようお願い申し上げます。

敬 具

お問い合わせ先；

日本病院会通信教育課

担当者：千須和(ちすわ)、星

電 話：03-5215-1044

F A X：03-5215-1045

厚生労働科学研究事業「我が国の統計における死因及び傷病構造の把握精度の向上を図るための具体的な方策についての研究」についての内容および研究協力のお伺い

1. 研究期間：平成19年4月1日から21年3月末日まで（2年計画の1年目）
2. 研究組織：山本修三（主任研究者。日本病院会会長）、大井利夫（分担研究者。上都賀総合病院名誉院長）、川合省三（分担研究者。大阪南脳神経外科病院副院長）、島津邦男（分担研究者。埼玉医科大学教授）、菅野健太郎（分担研究者。自治医科大学教授）、西本 寛（分担研究者。国立がんセンターがん対策情報センターがん情報・統計部室長）、三木幸一郎（分担研究者。北九州市立門司病院内科部長）、藤原研司（分担研究者。横浜労災病院院長）
3. 研究概要： 昨今、病院をはじめとする医療機関の機能分析や疾病構造の解析において、疾病分類と統計の精度向上が問題になっております。その際に用いられる国際疾病分類（以下ICD-10）は、特定機能病院などにおけるDPCにおいても必須のものであり、その重要度はますます高まっています。しかしながら、ICD-10についてはまだまだ問題があるのが現状です。

当研究では、このICD-10の構造や内容についての問題を拾い出し、各医療機関の死因統計を含む医療に関する統計の精度向上を図るための研究を行っております。

本年度は昨年度の調査で回答のあった施設に対し、「死亡例」「退院例」について、実際の診療録に記載された病名・病態と対応するICDコードとの一致度を調査し、病名記入上の問題点などを明確にすることを今年度の調査の目的とします。

4. 今回の協力作業について： 当研究調査につきましては、全国の対象病院から、①今年6月以降の10例の死亡例について、各死亡者の「死亡診断書」「退院時要約」「診療情報管理データ」②今年8月以降の退院した順に、できるだけ異なる診療科から10例の退院患者の「退院時要約」「診療情報管理データ」、を提供いただきました。これらはすべて個人情報保護のために徹底した匿名化をし、更に症例毎にパスワードをかけ、PDF化しました。つきましては、ご協力いただける先生方にはこの処理しましたデータにつき、次のような「評価作業」にご協力をいただきたく存じます。

- 1) 6月以降の「死亡例」について：死亡診断書に基づく原死因と、退院時要約から読み取れる原死因の各々のコーディング（別紙参考の評価シートを参照ください）
- 2) 8月以降の「退院例」について：退院時要約の主病名欄の病名、退院時要約本文から読み取れる主病名、について各々のコーディング

以上の内容でございますが、この研究の評価作業につきご協力いただけるか否かお伺いいたします。別紙に諾否をいただき、早急ではございますが今月17日（水）を目途にファクス（03-5215-1045）までお送り願います。また、ご協力いただける皆様には、後ほど順次、死亡診断書などのデータをご送付します。その取り扱いについて遵守を期すため、「研究事業の協力に際しての個人情報保護に関する確認書」にサインをしていただき、同封封筒にてご返送ください。

諸事ご多忙と存じますが、よろしくご協力のほどお願い申し上げます。

以上